

2017年ジュニアエペワールドカップ ラトビア大会

審判活動報告書

FJE 審判委員会委員 佐藤 公良

2017年10月14日・15日の両日、ラトビア国リガ市でジュニアエペワールドカップが開催されました。標記大会に帯同審判員として参加いたしましたのでご報告いたします。

1.大会日程

10月14日(土)	審判会議 個人戦
10月15日(日)	団体戦

2.審判活動内容

会場は2会場でピストの総数は21ピスト、個人戦の出場者が240名、団体戦に25チームがエントリーという規模の大会でした。

初日の個人戦では7名プールを最初がノルウェー、二回目がイタリアの審判員と組んで行いました。その後、エリミナション・ディレクトのT32までの6試合を行い、そこから上位の指名はされませんでした。決勝までの貼り出しが終了してからは、経験値やスキルの高いヨーロッパの審判員のマッチコントロールを学んで帰ろうと思い、DT周辺で審判員達とコミュニケーションをとりながら、上位マッチを観察しました。また、プール戦で組ませていただいたノルウェーの審判員にランチに誘われ、ベルギーの審判員と3人で食事をしました。簡単な会話はできても、まだまだ会話を楽しむ域には達せず、英語力の拙さを痛感しました。

T32まででこの日の審判が終わった事で、多少はがっかりした気持ちがあったように思います。「やはり経験を踏んで名前を売らない

とやらせて貰えないのか」「自身の審判スキルは話しにならないレベルなのか」と。ただ、各国審判員の皆さんと審判員席で入れ替わり立ち替わりコミュニケーションがとれたことで、有意義な時間を持つことができました。そんな複雑な気持ちで初日の個人戦は終わり、決勝まで試合を見て、ホテルに戻ったのは夜 8 時過ぎでした。とにかく経験第一、上位指名がなくても前向きに翌日の団体戦に臨もうと切り替えました。



団体戦は、T16 と順位決定予備戦までの 3 試合をジャッジしました。この中で「確実に相手をついたトゥシュ」と「床か脚か定かでないクー・ドゥブル」が発生しました。確実に相手を突いた側の選手に両方の得点とするか、無効とするかを選ぶように指示しました。選手はクー・ドゥブルを選択しましたが、コーチからは「なぜ両方に得点が入っているのか」という抗議が来ました。簡単に説明をし、こういうルールですよということで納得させましたが、エペにおいてはルールの適用についてこうした説明を求められることはどの大会でも非常に多いと思います。また特に団体戦では、ベンチもヒートアップする可能性が非常に高く、いかに短い時間でクールダウンさせて試合を再開できるかを心がけました。

試合が進み DT に順位決定戦のスコアシートが貼り出され、下位の順位決定戦からずっと見ていました。5 位決定戦あたりまで見て名前がないので、今回はこれで終わりだろうなと感じました。ところが、ファイナルのシートに私の名前がありました。ただ 3 番目に

名前が載っていたので、わざわざ来た日本人に経験を積ませてくれようと副審をさせてくれるのだろうと勝手に思っていました。ところが決勝前のデレゲイトからの指示は、主審は3試合交代で、私は7～9試合目を担当するよにとのことでした。優勝決定の瞬間のジャッジをしろということです。この大会はビデオ判定システムも設置されておらず、正直期待と不安が入り乱れた状態だったと記憶しています。

ハンガリーとフランスの決勝戦、最終第9試合は27対21でハンガリーリードでノン・コンバティビテ。フランスのアヴァンタージュという状況の中でそれは起こりました。フランス選手の小手を狙った遠い間合いからのアタックとルミーズ。完全に届いていないように見えたが、フランス選手のランプは点灯しました。ハンガリー選手は突かれていないとアピール、私も同様に判断し副審に確認し、やはり届いていないとの返答。ビデオがあればはっきりするところだがそれもない。原因を突き止めなければならないのでトゥシュは宣言しなかったため、フランスコーチからは当然のように抗議が来ました。距離も遠く、タイミング的にもエラーだと説明しましたが、納得するはずもありません。しかし、たまたまその直後に誤作動でランプが点灯し、剣の不良ということがわかり事態は収束しました。実は、ノン・コンバティビテを宣言した時フランス選手はベースの緩みが気になり、主審である私の許可を得てレンチで締めていたことを思い出しました。私は主審によるベースのチェックをせず、剣の修理を許可してしまっていたのです。チェックして緩んでなければ許可はしないし、緩んでいれば剣を変えさせる等やるべきことはあったのに、それらを事前に怠ったことを反省しました。エペは何が起こるかわからない、不測の事態に備えて予防線を張っておくことは、非常に重要なスキルであると感じました。

3.まとめ

レフリーは様々なシチュエーションで発生したプレイを瞬時にルールと照らし合わせ即座にジャッジしなければならない責務があります。エペはフレイズのない種目なのでトゥシュなのかパドゥ・トゥシュなのか、ラインから出る前なのか後なのか、相手を突いたのか相手以外を突いたのか、交差前なのか後なのか等、様々なシチュエーションの中でのトゥシュや違反が頻繁に発生し、その中でプレイを見極めなければなりません。改めてエペのジャッジの難しさを痛感しました。



また審判器や用具等に不具合が起きるしくみをしっかり熟知し誤作動が出た時も素早く対処できなくてはならないということも必要なスキルであると感じました。

ジュニア世代は今後の飛躍が期待される世代であり、選手たちもそういった意気込みで大会に臨んでいたように感じました。わずか二日間の大会とはいえ各国の若い選手たちが真剣勝負を繰り広げる場で、審判員として多くを学べたということは非常に大きな財産となると思います。

今回の経験を踏まえ今後さらなるスキルアップを図るべく精進したいと思います。